

生徒自らが考え、判断する能力を育成するために、新聞をどのように活用していったらいいか。

丸子町立丸子中学校教諭（前青木中学校実践代表） 大 澤 隆

1. 実践の概要

(1) N I Eコーナーの設置

①全校N I Eコーナー 生徒校舎壁

・生徒に紹介したい記事を掲示したり、生徒の取り組んだ新聞スクラップの紹介として活用

②学年N I Eコーナー

各学級から3～4名のN I E委員を選出し、各学年の廊下に学年N I Eコーナーを設け、その日の新聞記事から気になるものをスクラップし掲示した。また各学年のN I E新聞の管理を任せた。

(2) N I E月間とN I E講演会

10月下旬～11月下旬にN I E月間を設け、金栗洋二郎氏の講演を行った。

演題『新聞を読む』

(3) 各教科などでの実践

①社会科（大澤隆教諭）

ア. 新聞記事の紹介 3年2クラス（1学期）、1年1クラス（3学期）

順番で新聞記事を紹介しコメントを発表

イ. 長期休業新聞スクラップ 1、2年生全クラス・・・・・・・・・資料1

夏休み（15日分以上） 年末年始休業（5日分以上）

記事を見つけ、ルーズリーフに貼って100字程度のコメントをつける

ウ. 新聞スクラップ 3年2クラス(2、3学期)、2年2クラス(9月～3月)、1年(3学期)

週に2つ以上の記事をスクラップして提出

エ. 「高齢化社会と社会保障」（3年 公民的分野 7時間扱）

オ. 「株式売買ゲーム」（3年2クラス 11月下旬 公民的分野 3時間扱）

N I E講演会を受けて、各白100万円を元手に好きな銘柄3程度を買って株価の推移を追う。

②3年選択数学（小池さとみ教諭）

新聞に載った統計グラフを見て、その読み取りと考察を新聞形式にまとめる

資料を読み取る力、資料を再構成してまとめる力の育成に効果があった。

③学級活動での実践（宮原弥生教諭、山下雅弘教諭）

短学活での新聞記事の紹介 3年2クラス 2～3学期

1学期社会科で行ったことが学級で引き継ぐ形で行った。

(4) N I E全国大会への参加と報告会

昨年仙台大会に引き続き、大阪大会に参加し、その報告会を職員会で行った。

報告会の事例を参考に、選択数学で社会科や学級以外での実践が試行され、N I Eの新たな分野への可能性を広げることができた。

(1) 新聞の配置場所

また、各学年で毎月一紙は、連続して購読できるようにすると共に、全校で毎月五紙が購読できるように新聞購読計画を作成した。

(2) 新聞の整理

各学年のN I E委員が中心となって、新聞記事の紹介や新聞の整理を行う。また、校務分掌に特設のN I E委員会を設け、各学年1名の職員が生徒の指導に当たると共に、新聞の保管や整理を行った。

3. 实践例

(1) 夏休みの課題
「新聞スクラップ」
— 中1、2年
4クラス —

青木中1、2年生

夏休みに新聞記事スクラップ

小嵐郡龍村の青年、二十二年生約旦十の夏休みの宿題は、新聞記事のスラップだった。氣になつた記事を取り返さ、百頁程度の感想を費へ内容。二十三日の夏休みのうち最低十五頁が稼がれた。新聞局用教育（NIE）の一環で、昨年同様回目。与えられた問題を解くとは違ひ、自分の興味をじっくりと見つけたことを求めた。

教育



「不況花火大会にも……」
コメント
生き生き

「まただ（不図）」とトカーの窓に立つてゐるの三文字。この三文字は豊の犬夜叉ペントにある花子と花子までも惹きあふるとしてゐる。

八月三十日の年組組の撲撲は花子の撲撲、上野哲也は花子大友会があるから協賛金が集まず、中野節もあつたことを伝え花子を取り占、感嘆絶頂であつた。

討論会になつた。

夏女みの宿願だった無償留学に成功し、この奨学金を
る青木中の生徒たち

平和寛政文、青木村の三年生がハム・ステーキです。うらやみに免する記事などは「たゞかり」と題して、不登校という教育問題、野良娘の日常を紹介する等、異なるとは明る、話題も自立したテーマを定め、執筆の間に限った昨年と比べると、生徒のコメントが生き生きと見えていたと大分教師も「たゞかり」と題して、中学生になかなか開いて、テーマを選び生徒が自分でまとめることと、興味を高めたとと語す。生徒は余格の良きものであったことも、効果を生

〈生徒の感想1〉

新聞スクラップをやってとってもいい経験になりました。…中略…
やっていく内に楽しくなってきました。記事を切り抜いてコメント
を書く。コメントにはとても困りました。なんて書こう！毎日思っ
ました。自分の思ったことを素直に書けばいいんだ。そう思うと手
が勝手に動くような感じでした。 〈宮澤志織〉

1日に1つの記事を15分。結構楽しかったけど、大変でした。15個の記事だけど、今まであんまり見なかった新聞を見て、切り取ってないところまで最初から最後まで目を通してしまいました。そしたらなんだか、世の中のことがたくさんわかった気がします。ちょっと不思議な感じです。

〈国吉美紗子〉



〈成果〉

- テーマを決めてもよし、決めなくてもよいと自由にすることで、新聞に触れることの少なかった中学生に新聞を読む機会を与え、新聞を新たな情報源として気づかせていくのに大きな効果があった。また、生徒達は自由に感想を記述することで、記事を元に自分で考えるきっかけとなった。
- 生徒達が自分で考えたり、自分の考えを発表する機会を求めていることに気づかされ、その場を十分に与えないまま、その能力を引き出せなかった教師としての自分に気づかされた。
- この後2～3学期にかけて新聞スクラップを継続していくきっかけになり、生徒が自ら考える習慣がついてきたように思う。

(2) 社会科3年公民的分野『高齢化社会と老人福祉』 9月～10月 (別紙資料1、2投書)

〈実践時期の選定〉

- ① 来年度の介護保険制度の導入と「敬老の日」を控え、各紙に高齢化社会や老人問題に関わる記事が取りあげられやすい。
- ② 文化祭での村内の特別養護老人ホームのお年寄り招待を控え、生徒達の関心も高い。
- ③ 新聞が学校に配置されるようになり、生徒達が新聞からの情報を得やすい。

〈単元展開案〉

1. 新聞記事から高齢化社会の様子を読みとり、学習問題を設定する

(1) 最近の新聞記事を読む

- 新聞記事「100歳以上の人口1万3000人」(9/8朝日)
- 新聞記事「おまえ100歳わしゃ101歳」(9/8朝日)
- 新聞記事「高齢化人口2100万人」(9/15各紙)

* 高齢者でも元気で頑張っているお年寄りが多いことを意識させる

補助資料①全国、長野県・青木村の高齢化率

こんなに多いとは思わなかった
青木村は20年後の日本だ
年寄り子どもだけになって心配

・施設は十分か、
・女性や家族の介護の負担
・お年寄りの世話をする人は

年金や医療費など財政が心配だ 若年層への経済負担が多くなるのでは

(2) 高齢者介護を巡る事件の記事を読む

- 新聞記事「77歳双子の遺体」(9/11産経)

・なぜこの双子姉妹は、死後20日近くもたって発見されたのか
・施設などへは入れなかったのか 他の家族や親族は
・近所の人は気がつかなかったのか

補助資料②全国、青木村の高齢者世帯の増加
(新聞記事)

2. 学習問題

補助資料③「お年寄りのための福祉のし
おり」(青木村在宅介護支援センター)

補助資料④「老人の世話は誰がみるか」
(全校アンケート、新聞記事)

高齢者の介護はどうすればいいのか
学習課題

自分の親が要介護になったとき、あなたはどうかしたいか シュミレーション

(3) 家族会議を開き、それぞれの立場からどうすればいいかを考える

〈長男の立場〉

自分は会社があるので
妻に面倒をみてもらう
妻にはパートの仕事を辞めてもらう
会社が休みの時は自分も見る

〈長男の妻の立場〉

- ・結局自分がやることになると思う
- ・パートの仕事もあるし、夫や子どもにも手
伝ってもらう
- ・家計のことを考えるパートは辞められない
- ・子どもの面倒もみなければならないし

施設の利用も考えなくてはいけない 施設に入れた方がいいかも

(4) 家族会議の意見も参考に、それぞれが介護プランを作ってみよう

在宅介護を中心として、福祉サービスを活用
○妻にはパートを辞めてもらう
○妻のパートは続ける
 デイサービス、ショートステイも活用
○家計の切り詰めも必要
○家の中の改築も必要になる
 階段、廊下の手すり、トイレなど

施設入所での施設介護を中心
○安心できる
○費用が心配
○すぐに入所できるか
○出来るだけ会いにゆく

(5) プランを実施していく上で、障害となることは？

- 介護支援サービス面
- ・デイサービスは毎日出来るのか
 - ・ショートステイはいつでも出来るか
 - ・ホームヘルパーはどのくらいの時間をみてもらえるか

費用 どのくらいかかるのか
介護サービスにかかる費用は？

お年寄りだけの緊急時の対応は？ 介護の技能に自信がないが

3. 在宅介護支援センターの小林さんに相談してみよう

*小林さんの助言を受けて介護プランを修正する

◎介護プランを作ってみての疑問や新たに知りたい情報をお聞きする

◎青木村の介護福祉サービスの現状や考え方、課題などをお聞きする

4. 国の社会保障制度や老人福祉制度についてまとめてみよう

○各自の介護プランを作り直してみる。 ○各制度の大要と老人福祉制度をまとめる

○財政問題を中心に高齢化社会の進展の課題について考える

5. 高齢化社会に向けての自分の関わり、本単元の学習で考えたり学んだことをまとめる

*新聞社投稿欄への投稿 (NIE)

信濃毎日新聞「建設標」へ投書を書く

*ラポートあおきお年寄りとの今後の交流を考える

〈授業での新聞記事を活用した場面での生徒の動きと考察〉

新聞記事から高齢化社会の進展をとらえ、老人介護が問題になってくることをつかんでいった生徒

毎日新聞から全国の高齢者の数値を

信濃毎日新聞から長野県の高齢者の数値を

青木村在宅介護支援センターの資料から青木村の数値を

読みとり感想を発表させた。

「高齢化の進展をどう思うか」

2116万人	16.7%	1/6
46万人	20.8%	1/5
1408人	27.3%	1/4

- p1：日本の高齢化率を知っての驚きよりも、長野県の高齢化率よりも青木村が高いことを知って驚いた。これから当然高齢化率が高くなると思うけど、それだけ長生きしているひとがたくさんいて、いいことだと思う。
- p2：高齢者が増えてもいいと思う。人口も減らなくてもいい。でも、年金がきつくなり、今の若者も苦労しそう。
- p3：元気なと年寄りが増えることはいいことかもしれないが、子どもが減っていて、医療機器など発達している今、日本はこれからも高齢化が進み、だんだん問題がでてくると思う。
- p4：自分のおじいちゃん、おばあちゃんには長生きしてほしいし、自分ももっと長生きしたいと思う。長生きが増えたのとらえればうれしいが、養ってもらわなければいけない、あるいは介護を必要とする存在が増えるというのは問題があるのでは・・・
- p5：（私の家もそうだけど）高齢者の介護するようになったら、介護所も必要になるので、これからどうなるか？心配

《考察》

思った以上に生徒は高齢化社会への関心を持っており、「年金」「医療費」などの財政を心配する感想もあった。しかし、多くは「介護」へ目を向け、介護への不安を訴える生徒が多かった。

◎新聞記事「77歳、双子の姉妹の遺体発見」（産経新聞）を読んで、

- p6：福祉センターに入ってそれで介護をすれば大丈夫だったかもしれない。
- p7：なぜ老人ホームには入れないだろう、そういうのは国の責任だ。
- p8：近所の人や家族はどうしていたのか。
- p9：「うっそう！」と思うより、「あり得る」と思えた。「何か対策が必要だ」

資料 読売新聞記事から、全国の高齢者世帯の
数をよみとらせる
青木村の高齢者世帯（奉仕員会作成）

全国の一人暮らし	242万世帯
高齢者だけ世帯	349万世帯
（青木村）	222世帯 1/4

- p10：家族の面倒をみてやれなかったのか
- p11：高齢者だけの生活は危険だ。

《考察》

この事件を特別な事例としてとらえるのではなく、どこでも起こりうるもの、青木村でも起こりうるものとしてとらえられるようにするため、青木村の高齢者世帯の推移を提示して配慮したことで、自分たちの身近な問題として老人福祉をとらえることができた。

- (2) 学習して考えたことや学んだことを新聞への投書で堂々と訴え始めた生徒たち

投書のテーマ例 「老人介護について考える」「ボランティア活動から」

「高齢化社会について考える」「私の老後」など

社会科の授業での感想を中心に書いた生徒が多かったが、これまでの自分のボランティアや高齢者への関わりを見返して主張した生徒も多かった。また、投書という形をとったことで、生徒の出筆意欲もわいたようで、ほとんどの生徒が自分の主張としてまとめることができた。

(計7名の生徒の投書が採用され、10月～11月にかけて掲載された。また2名のお年寄りからの反響も寄せられた)

〈実践しての成果と課題〉

- (1) 生徒にとっての身近な自分たちの問題として「老人福祉」を考えるために新聞記事が大きな効果を上げた。新聞は現在の情報であり、生徒に「現実」の問題として意識させる上で大きな効果がある。

また、NIE実践校として5紙の新聞が提供されていた時期であり、各社の新聞を効果的に活用することができた。

- (2) シュミレーションを取り入れることで、介護に対する生徒の意志決定を迫ると共に、生徒の現在の認識を自分で見つめる機会とすることができた。この活動を通して、より自分の問題として老人介護の問題に迫ることができた。ただ、シュミレーションだけでは、介護プランの操作だけに終わってしまう危険性があり、そこに介護の現場に関わる職員の指導を入れたことで、机上の空論ではない生きた人間として高齢者の介護へと生徒の視野を広げることができ、介護問題をより切実な自分の問題としてとらえることができた。また、介護する立場の人たち、被介護のお年寄り、自治体や行政のねがいなどとの共感力を高めることに有効であった。また、この学習を通して「昨日お母さんと1時間も話した」といった声が聞こえたり、ある生徒は「今この学習に夢中で取り組んでいる」と書いてくるなど副次的な効果もあった。

- (3) 単元の学習のまとめとして新聞社への「投書」に取り組んでみたが、生徒がこれまでのこの単元での学習とこれまでの自身の体験を元に自己の考えを主張することができ、学習の定着の上でも大きな効果があった。また、これまで「井の中の蛙」的であった青木中の生徒達は、投書したことが掲載されたことで自分で考えると言うことに自信を持ち、更に反響が掲載されたことで、教室内の学習にとどまらず現実の社会との接点を持って学習することができた。

- (4) この単元を通して、私自身が生徒と共に学ばせてもらった。単なる情報の伝達や知識の定着に終始しがちな公民の授業で、生徒と共に高齢者介護を考え、私自身の視野も広がったように思う。

- (5) 高齢化社会の問題は、国の財政問題、地方分権、女性の社会進出、労働問題などとのつながりもあり、社会科の学習の中でどう位置づけていくのか？また、ボランティア活動など実践化へのつながりもあり、総合的な学習へとつながっていく面が強いように思う。3年の公民の授業での扱いとの関連が課題となっていく。

(3) 選択数学3年 2学期実践 (資料3. 生徒の作品)

- NIE大阪大会で紹介された、大阪府茨木市立太田中学校の実践例を参考にした。
- 生徒の統計グラフや統計表の読みとる力を定着させると共に、資料の再構成して自分の主張を取り入れて新聞形式にまとめる力を養うことをねらいとした。

〈生徒が取り入れたグラフ〉

- ・大学生の「学力低下」、「学力低下を感じる点」、「補習授業実施の大学」
- ・「宿命の病」肩こり
- ・「小麦の収穫量と政府買い入れ価格」
- ・「米国産大豆先物価格の推移」
- ・「学級崩壊」「学級崩壊の要因」
- ・「長野県冬の平均気温」
- ・「相続税の課税状況の推移」
- ・「人口10万人あたりの結核り患率の変化」 など

〈成果や感想〉

- ①現実には起こっている問題や課題を資料（グラフなど）をもとにとらえ、自分で考えようとする姿勢が見られた。また、まとめにあたって、新聞記事の見出しや活字を活用するなど新たな表現手段を取り入れる力が付いてきたように思える。
- ②自分達が自由に切り抜きできる新聞があったことで、学習が比較的スムーズに進められた。
- ③生徒の取りあげた話題を見ると

(4) 生徒会奉仕委員会

- ①ユニセフ「コソボ緊急募金」活動 4月

朝日新聞の記事を元に、ユニセフ緊急募金を前倒しで実施。委員会で資料を作成、各クラスに新聞記事を掲示し、募金活動を行った。

- ②文化祭への展示

高齢化社会や老人福祉に関わる記事をスクラップし、模造紙にまとめて文化祭で展示。

10月20日 (水)

10月23日 (土)

10月25日 (月)

介護の本当の 目的 自立支援

学校行事の一環である老人施設にボランティアに行きました。車いすに乗ったおばあさんが、一人で部屋に向かっていたので、手伝ってあげました。しかし、部屋の場所を聞いても答えてくれないのです。

部屋の前に来ると、おばあさんは一人で部屋の中に入って行ってしまいました。僕はただ、ぼつんと立っていました。そして「一人で行きたくないや、手伝わなくちゃよかった」と、思いました。数日後、社会科の授業で高齢化社会や老人福祉のことなどを勉強しました。その中で一番印象に残ったことは、「介護の目的」でした。今まで介護の目的は、老人の方々を助けるためと思っていたいましたが、本当の目的は「自立支援」だと知りました。僕はボランティア活動の時、なぜあんなことを考えてしまったんだと、今、後悔しています。なぜあの時、おばあさんの気持ちに気づいて

おげられなかったのか。「手伝つてあげる」というような気がする」からだから、そう考へてしまつたのでしょう。

これからは老人の方々の気持ちを理解し、「自立支援」のためにという考へを頭に焼き付けて活動していきたい。

小鼻郡 宮原 智之 15
(中学生)

介護に意識差
妻の負担心配

私は今、生徒会の
華仕委員会に入っ
ています。主な活動は
地域にある特別養護
老人ホームのお年寄
りとの交流です。お
年寄りと接する中で
老人福祉について関
心が高まり、先日の
学校祭では自分たち
で調べ、まとめた物

を展示しました。
その中で全校アンケートを実施しました。私が気になったのは、老人介護について男子と女子の意識の差がはっきり示されたことです。

例えば、「お年寄りの世話はだれがすればいいか」と思いますか」という問いに対し、「家で家族がするべき」男子三三％、女子三九％。「施設にまかせた方がいい」男子二三％、女子三％でした。

もしも同居する親の介護が必要になったら、私たちはどうするのでしょうか。

結局、家でみた方がいいと主張する妻に介護や家事の負担がかかり過ぎて、病気になるてしまうかもしれません。これでは介護される側の方にもつらいのではない

小泉郡 増田 麻奈 15 (中学生)

社会科授業で
介護のプラン

社会科の授業で「高齢化社会と老人福祉」という題で勉強をしてきた。そのなかで、将来自分の親が介護を必要とするようになった時、どのようにしたいのか、各自、介護プランを立ててみた。

「長男の嫁」とい

う立場で考えることになり、私は、実の親でないので、どうしようかと迷ったが、結局、在宅介護に決めた。施設に入るより住み慣れた家で暮らす方が、良いと思ったからだ。

しかし、疑問もあった。在宅となると、長男の妻は仕事をやめて、介護をするべきなのか。

在宅介護支援センターの方が授業にお見えになり、こんな話をしてくださった。理想としては在宅福祉だか、家族の中でだれ一人として犠牲になってはならない。お年寄りの意見を尊重しながら、よく話し合い、その家庭に合ったプランを立てるべきだ。良質で安い地域のサービスを使うことも一つの方法だ、と。

それまで私は、在宅介護は家族だけでするものだと思っていた。地域のサレバースも利用できると聞き、少しほっとした。少子高齢化といわれる時代において、介護を専門の仕事として、国民をバックアップしていく体制が必要だと思う。

小泉郡 原田 史 14 (中学生)

10月28日 (木)

10月30日 (土)

初めて知った 高齢者の苦勞

母は障害者施設で働いている。たまたま施設へ手伝いに行ったとき、お年寄りの苦労を知る「体験学習」のようなことが行われていて、私はしばらくその様子を見ていた。

体におもりをつつけ、服にも入れる。耳栓をし、目には黄色っぽい眼鏡。その格好で廊下を歩き、テレビを見、いすに座り、新聞を見るの何気ない日常生活で何気なくやっている動作

だが、体験者たちの様子は、私とは違っていた。
廊下を歩く足取りが重い。テレビも私にはうるさいくらいの大音量。いすも体が沈んで立ち上がり

やまびこ

「工場閉鎖」
スイッチOFFでおいまいか

一口バット

(東京都・1136)

福祉体験学習
気付いたこと

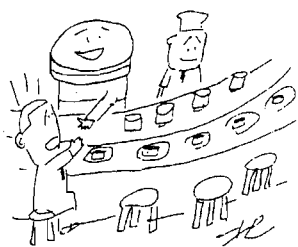
村内にある老人福祉施設へ体験学習に行った。車いすで施設を一周する散歩をしていた時のこと。

おばあさんが、こう言った。「なに、人の顔見て笑ってるんだ」。

たくさん伝わっていいかな
 ったのだ。その時、
 なにか分かったよう
 な気がして、胸が痛
 んだ。
 私はおばあさんの



やまびこ



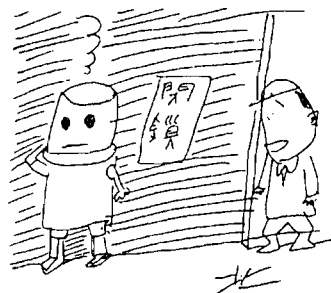
「回転ずし、ロボットで自動化」
帰り際に手を握られた

お客
(長野市・松五郎)

耳が聞こえないと
うことにさえ気付
ず、ただ一人でし
べて笑つていた。
おばあさんの気持
も考えずに……。も
自分なら、目の前
自分の顔を見て笑
ている人がいたら、
「なにかおかしいの
だろう」と思い、し
ても傷つくだろう。
こんなことがあ
って、私はとても深
考えさせられた。お
ばあさんの気持ち
なって考えるとい
ふこと。それが一番
切なんだなあ、と
いました。

小泉郡
花見 千絵 14
(中学生)

やまひこ



スイッチOFFでお願いか

—ロボット
(東京都・136)

にくいソファやよい硬い方がいいとう。眼鏡のせいなのか、新聞も読みにそうだった。これお年寄りの日常なめて。私はこの時、初めてお年寄りの苦を知った。

高齢化の進む中、私たちはどのくらいお年寄りの苦労を承っているのだろうか。どう接すればいいだろう。この問題一人ひとりがかえければならない。すぐ身近にある問題のだから。

小泉郡 室賀 美香 15 (中学生)

11月1日(月)

11月4日(木)

介護だれが―

新聞通じ学ぶ

上の人口は二千百六十万人で、六人に一人は高齢者であり、今後二〇四一年まで増える見通しとありました。そして、長野県の高齢化率は全国的にも高く、自分が住んでいる青木村も高齢化が進んでいると知り、だんだん身近な問題だということが分かりました。

日本の六十五歳以上の人口は二千百六十万人で、六人に一人は高齢者であり、今後二〇四一年まで増える見通しとありました。そして、長野県の高齢化率は全国的にも高く、自分が住んでいる青木村も高齢化が進んでいると知り、だんだん身近な問題だということが分かりました。

新聞を見てさらにびっくりしたことがありました。介護をもっと身近なことだと思っていたけれど、新聞を使った授業を通して、とても大変なことだと思いました。これからは、もっと身近に感じ、真剣に考えようと思いました。

北村 和也 15
(中学生)

祖母のような

老後迎えたい

私は将来、自分のおばあちゃんのような老後を迎えたいと思っています。

おばあちゃんは今、週に一度、近所の人々とマレットゴルフをやっています。ほかにも温泉に行ったり、畑仕事をしたり、小学校の同級生と旅行に行ったりしています。

私のおばあちゃんは何でも知っています。物知りなおばあちゃんでもありません。その一例として、梅雨のある日、大雨が降り、雷が鳴った時、おばあちゃんが私に「昔の人は雷が鳴ると梅雨が明けるといってたんだよ」と話してくれました。

私はそのことを知らなかったで、驚きました。まさに、おばあちゃんの知恵袋です。そして、雷

が鳴った次の日、おばあちゃんの言った通り、梅雨が明けました。本当におばあちゃんはずいぶんあと思いました。

高齢化はこれから進んでいくと思います。その中でも、私はおばあちゃんのような元気な、物知りのおばあちゃんになりたいなあと、思います。

小泉 美穂 14
(中学生)

やまびこ

十月の月間賞に長野市吉田五十二一五、会社員酒井藤彦さんまの次の作品を決めました。

介護を考える

中学生に感動

来年四月の介護保険制度実施をめぐりいろいろ議論されている昨今、20日の本欄で「社会科授業で介護のプラン」を読み、ペンをとりにくくなりました。

学校の授業で「高齢化社会と老人福祉」の勉強をした中学生の投稿でした。将来、自分の親が介護を必要とするようになった時、どうするか、考えたことを書いていました。在宅介護支援センターの方からは、理



やまびこ

「盗難防止策」
番犬を飼うことにした
―興 警
(中野市・豆たぬき)

更埴市
久保 久子 80
(無職)

11月4日(木)

中・高校生の
投書増に光明

いじめや不登校など、学校教育が数えきれない難問を抱えて、ともすれば暗くなってしまうような昨今です。しかし、このところ、一つの光明を見いだしたと思います。

それは最近、本欄に中学生や高校生の意見が多いことです。「心の時代」に入りつつあるのではありませんか。優しい思いやりと温かな心が感じられます。

10月28日の中学生の投稿は「初めて知

やまびこ

「添食器で給食」
股擦気分を味わえるかな？
―榎川村の小学生
(長野市・西宮居士)



った高齢者の苦勞」もがいつか通る道でというタイトルです。その立場や心境た。「老い」はだれなどに思いを寄せて

くれる若者は、それほど多くはないと思っていました。的確に観察してくださっていました。

寂しそうなお年寄りもいる中で、このような温かな思いやりと優しさを待って、若者たちがこれからの高齢化社会を心に掛けていくべきである、本当にありがたいことです。

老人の私たちも、若者に甘えることなく、これからの日々を有意義に過ごす努力をしたいと思えます。

更埴市
榎山 静子 77
(主婦)

結核 再び拡大の恐れ

(9月7日の新聞より)

結核は「過去の病気」という認識から、医師にも油断がある。

1997年に国内で新規に登録された結核患者数が4万2715人に上り、38年ぶりに減少から増加になった。

今年7月26日、厚生省は感染拡大の懸念から「結核緊急事態宣言」を発表した。

県内で97年に新たに登録された患者数は375人。(5866人に1人)

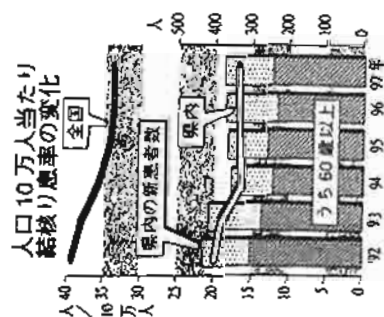
中でも最近注目されるのは、高齢者の発病が目立つ。

県内で97年に登録された患者のうち66.4%の249人が60歳以上。

戦前から戦後の流行期に感染した人が、老齢化の抵抗が弱ったため、発病している上という指摘がある。

1935年から50年にかけ7日本人の死因の1位だった。98年は22位。

Qさー。今年は何...?



ガラフは、
縦が人数を
あらわし、
横は「年
(1年ごと)」を

あらわしている。
結核は集団感染に結びつく
危険性がある。
教員1人から生徒42人へ。
2人死士から看護婦12人へ。

昔は、医師も注意して診断していたけれど、今は昔のようにならず、逆に若い医師にと代がっているため、結核と判断するのは難しいようだ。最近の若い医師は先輩の医師からたまたま配られた「最近の若い人が多い」とも、結核には注意しよう!! 結核は、せきや発熱など風邪の症状と似ているので、もしそのような症状が出たら、病院に行かないと、そのまわりまわりの人々にうつるので、まわりの人も注意しよう!!

—END—